

句集

秋日和

お
お
た
さ
つ
き

序

吾が親愛なる福岡のおおたさつきさんが初句集を出されることとなった。誠に喜ばしい。

彼女とは『ゴスペル俳句』の添削指導を通してご縁が生まれ既に六、七年になる。句会出席の叶わない地方にあって独り黙々と句作を続けるのは至難の努力がある。挫折の誘惑は何度もあったと思われるがこれだけ長期に忍耐されたのは唯一彼女だけである。

彼女の作句スタイルはひたすら客観写生・吟行一途で虚構とは全く無縁なのである。

吟行の一期一会や古日記

もともと山野草が好きだという彼女は、ご主人からスケッチの手ほどきも受けられていたようで写生眼の点においては当初から非凡なものがあつた。

熱心な彼女は、みのる日記から作句のヒントを吸収することにも貪欲で、吟行で出会った地の人との対話の大切さを知り、すぐさまそれを実行して作品に反映させるのであった。

長生きの金魚自慢す翁かな

指先の勘が命と松手入

数年まえ広島吟行をした翌日に、彼女を伴って波出石品女さんを訪ねた。そのお人柄と俳句と向きあう真摯な姿勢に直に触れて欲しいと強く願ったからである。品女さんも快く受け入れて下さり今は彼女のメンタルを優しく支えて下さっているとのこと感謝に絶えない。

一と匙に山傾きぬかき氷

風鈴の舌にそれぞれお品書

さつきさんの作風に変化が見られるようになったのはその頃からかもしれない。どこことなく品女調の香りが漂うように感じるのは私だけだろうか。

斯くして俳句は今やさつきさんの生活の一部いや大部分になっているが、それを理解し背後で応援して下さる優しいご主人の存在あることを忘れてはならないのである。

水遣りを夫に念押し夏の旅

吾はホ句夫はスケッチ秋日和

ご主人は趣味のスケッチを通じて地域の人々との交流の場をつくるために奉仕活動もしておられ、彼女もまた会場準備などのお手伝いをされるといふ。手法は違っても対象物に心を通わせてその生命を写しとるといふ意味では変わらない。これからも互いに支え励まし合っ

て末永く良き人生を歩まれるようにと祈ってやまない。

さつきさんには軽印刷の会社に勤められた経験があるので、さまざまな句集作成のたびにその知識を活かして快く奉仕協力してくださった。このことは『ゴスペル俳句』の活動において大きな援護となった。句集の序を借りて心からのお礼を申し添えたい。

平成三〇年七月吉日

やまだみのる

每日句會入選句

大の字に野良着干されし梅雨の晴

園児らが実梅拾ひのお手伝ひ

シヤッター街軒にいくつも燕の巢

薔薇アーチ英国風の庭園に

緑陰に集合したるヨガマット

ネクタイを外さぬままに花筵

玄海の潮に育ちし若布刈る

目覚ましをかけずともよき朝寝かな

蟹の家物干し竿に若布干す

釣宿は柄まちまちな布団干す

ハングルも英語も混じる受験絵馬

トンネルを抜けるや否や山笑ふ

新酒よし枅の空の香さらにまた

牡蠣打女弾むよもやま話かな

春の雪箒目隠すほど降らず

雪分けて道標見る深山路

旋回す鳶に届けと凧上げる

七五三小首傾げて写真撮る

禅寺の底冷えしたる廊下かな

捨舟を覆ひ尽くして黄落す

天守閣そびらに競ふ菊花展

銀杏散るサイロの屋根に堆く

徒ならぬ肺活量や鳩潜る

枯蓮の折線グラフめきにけり

愛犬の鼻に尻尾にいのこずち

窯煙直立したる天高し

時の人案山子となりて並びけり

日曜も早起させよと鴉叫ぶ

汗滂沱遺跡掘る人気の毒な

流灯の不即不離なる二つかな

岸離れ難き流灯そつと押す

問安す水禍の里の梨実る

花火待つなぞへに足を投げ出して

揚花火息つく隙もなく連打

肩車されて加はる躍りの輪

病棟の軒より巢立つつばくらめ

軽鳴一家無事と安堵や出水跡

注連縄の古し喬木蟬の殻

サングラス外せばなんと好好爺

色変へぬ磯馴の松や古戦場

水の面を駈くるごとくに鴨翔ちぬ

大岩を袈裟懸けに蔦紅葉燃ゆ

秋高しブラスバンドの楽もまた

潮入りの流れにのりて浮寝鳥

激つ瀬のしぶきに耐ふる蜘蛛の糸

夕日落つ波止のベンチに秋の人

双眼鏡真澄の鷹をとらえけり

食べごろと尻押して見るラフランス

打水に濡れて艶けし石畳

天高くバトントワラー宙に舞ふ

虹の橋へと機首たてて飛機離陸

オルゴール流れて無人駅涼し

閉店の軒の風鈴よくなりぬ

あひ揺れてネオンの影と流灯と

うたた寝のまぶたを射抜く稲光

幼らは足をぶらぶら氷菓食ぶ

階なせる岩は常濡れ滝の道

激つ瀬のしぶきに紛れ夏の蝶

立錐の余地なく濠を埋む蓮

城濠の蓮の百態見て飽かず

ストローでまわす氷の音涼し

カルストの起伏野歩む白日傘

踏切を待つ吾に隣る立葵

長生きの金魚自慢す翁かな

笛の音が闇を切り裂く薪能

村中に新茶の幟はためきて

清流に沿ひゆくバスの窓涼し

人肌の温みが大事新茶汲む

薫風や茶畑に立つ大風車

島巡るレンタサイクル風薫る

夏の蝶急磴のぼりつめんとす

新茶汲む手もみの労をねぎらひて

あたたかや震禍の安否問ふ電話

山桜峡の奈落へ吹雪きけり

自転車を土手に寝かせて土筆摘む

紅白の梅の遅速に園巡る

ハイヒール脱ぎ捨て土手の青き踏む

牡蠣舟の吃水深く戻りけり

のどけしや牛車で巡る城下町

さざなみのごとく水尾引く鴨の陣

酒樽のピラミッドなす初恵比須

緋毛氈敷きて戎の猿廻し

荒波の海に向ひて出初式

中空に遊泳中のどんどろ

白無垢の侘助浮かぶ手水かな

都府楼の空せめぎ合ふいかのぼり

福寿草ビロードの苔貫きて

五十肩癒えよと浸す柚子湯かな

コンビニへ飛び込んで買ふ時雨傘

冬耕の手を止めマラソン応援す

夕暮の影を連ねて鴨の陣

写真撮る頭に肩に銀杏散る

遠山の水墨画めく時雨かな

幼らの伝言ゲーム日向ぼこ

登高や九十九島の展けたる

リュック置き思ひ思ひに花野行く

内湾のブイには非ず浮寝鳥

相討ちの様に交差し蓮枯るる

ボート漕ぐ湖面の夕日横切りて

天高く噴煙よぎる機影かな

木道のつづく限りの花野かな

老母の背中撫で撫で日向ぼこ

落暉いましかめつ面の案山子翁

愛犬と肩並べ見る良夜かな

十五夜の芒を肩に戻りけり

大漁旗はためく島の運動会

敬老日父の手を引き理髪店

防人の歌碑誦してより秋思憑く

指先の勤が命と松手入

干されある浜の漁網に残る虫

老妻の背ヲ押し歩む遍路かな

地下道を住処としたる昼の虫

噴煙を呑み込んで立つ雲の峰

ごと転ぶ牧草ロール秋日影

秋の日の目つぶし食らふ観覧車

蟻の列帆のごと揺るは蝶の羽

星の竹戸ごとに並ぶ漁村かな

人だかり絶ゆることなき花氷

揚花火間遠にひびく家路かな

対岸に犇めく顔や揚花火

風鈴の舌にそれぞれお品書

篝火に黒子めきたる鶉匠かな

電柱の片陰さえもありがたき

梅雨最中訪ひし図書館休館日

蓮の葉を転落したる子亀かな

大仰に撃たれ伏すなり水鉄砲

相互ひ手話で語らふ端居かな

犇ける蓮の葉くぐる風のあり

水遣りを夫に念押し夏の旅

この石がパワースポット樹下涼し

蛍火を包む幼のたなごころ

喬木の根方の殊に濃紫陽花

作業着を垣根に干して三尺寝

草刈りの牧一面に匂ひ立つ

薫風裡紙飛行機は森へ消ゆ

杉襖より湧き出でし夏の雲

桐の花谷戸に古びし一軒家

山頂の風に忽ち汗の引く

禪寺の庇となりし若楓

遠足子ギブスの友に肩を貸す

露広葉右に左に風いなす

碧落に黒点となる揚雲雀

小魚のはねる干潟の潮だまり

瀬の波の影遊びる若楓

藤房の下を潜りて汲ん場へと

高枝に鈴振るごとく轉れる

鳥帰るV字V字に棹なして

天守台見渡す限り花の雲

三線に唄ひて花に集ひけり

溪流の岩から岩へ蜘蛛の糸

野に遊ぶわたしは句帳彼カメラ

あたたかや盲導犬の吾を見る眼

道長閑ただいま牛の横断中

丸太橋濡らして逸る山葵沢

啓蟄の大地に広ぐ設計図

観覧車廻るともなく遠霞

マツチ箱ほどの御殿に豆雛

ひとつかみ拾ひし若布家苞に

番犬の寝ぼけ眼や春うらら

山焼きの匂ひが風に乗つてくる

廃坑の鉄路の跡に下萌える

寒釣の一人一人の礁かな

寒牡丹雀も苞に宿りけり

連鎖して一斉に翔つ百合鷗

藁苞の高さまちまち寒牡丹

引き潮に煌めく影は千鳥かな

落椿 嵩なすここに不老水

着脹れて吾子の駅伝応援す

神木をけぶらす宮のどんどかな

東雲の空も焦げよとどんど燃ゆ

水仙郷玄海灘をパノラマに

トレッキング姿で交はす御慶かな

大冬木広場に長き影法師

工事場の塀も電飾クリスマス

都府楼の礎石に座して日向ぼこ

黄落の真つ只中に殉教碑

手庇に見ゆる湖心の浮寝鳥

鴟
夕
べ
杜
を
席
卷
し
て
猛
る

自
転
車
の
籠
い
つ
ぱ
い
に
秋
の
草

力
石
水
引
草
の
花
影
に

落日を散らして光る鳥威し

朴落葉目鼻のごとく穴の開き

露地屋台葎簀に吊るすメニューかな

シヤッターの軋む悲鳴や梅雨湿り

梅雨に濡れ深き刻字や力石

と見る間に特急通過風涼し

白シャツの卒寿がタクト振りにけり

アトリエの涼し鉛筆よく走る

春落葉否梢洩る雀どち

園抜けて落花まみれにバス現るる

鶺鴒の巣とゆびさされたる高枝かな

草木染め吊す工房春灯

機嫌良き猫の尻尾や日向ぼこ

号外を手渡す人の息白し

狛犬の鼻面を這ふてんと虫

水仙花寢墓の丘を埋めつくす

干柿の萎びしままに一山家

吟行の一期一会や古日記

括られしまま傾きて菊枯れる

水鳥の水尾煌めかす夕日かな

トラツクの牛と目のあふ秋思かな

力石銀杏紅葉をしとねとす

自販機の前に屯す夜業人

ひねくれしままに太りし秋茄子

秋の川奇岩巨岩に激ちけり

竹棒に帽子を載せて案山子とす

露草へしぶきを飛ばす水車かな

バネ競ふごとくに跳ねる田の飛蝗

背ナ押され吾も踊りの輪の中へ

眼鏡橋くぐりて峡の赤とんぼ

写真撮る夫へ団扇の風送る

バス降りし吾に怒涛の蝉しぐれ

東雲の空一面に翳雲

ポリバケツ置かれし頭上燕の巢

夏草に埋もれポンコツ積まれけり

一と匙に山傾きぬかき氷

朝礼の声をかき消す蝉時雨

瀬しぶきに濡れて煌めく羊歯涼し

瀬の楽とハーモニーなす蝉時雨

道涼し塵拾ひつつ歩く人

老眼鏡かけたるままに昼寢覚

万緑の底ひに谷戸の一軒家

指
笛と三線の和す
楽涼し

風鈴の大合唱す
小間物屋

空港の端から
端へ虹の橋

吾妹子に掬ひて見せる螢かな

蜘蛛の罎の風にふくらむ強さかな

ゴツホの黄うち広がりし麦の秋

代田いま谷戸の里山映しけり

若葉風牛舎の匂ひ運びくる

両の手に若布引きずる浜の人

ボロ布を剥ぐごと羊刈られけり

花虻の相頭突きして遊びをり

軽鳧の子の行進池を一巡り

バス停の標傾く花菜畑

ジャズ流れゐて酒蔵の春灯

車座に犬も加はる花筵

出勤の廻り道して花堤

下萌に紙飛行機の着陸す

群鳩の翻るとき風光る

摘草の袋見せ合ふ親子かな

芽柳に数珠とつながる雨雫

枝垂れ梅吾が肩に触る茶屋床机

柳の芽破線となりてなびきけり

春光や撫で牛さんの鼻のさき

せせらぎの奏づは春の唄ならむ

身じろがぬ鹿の睫毛に風花す

黒ぼこの畝うつすらと下萌ゆる

膝さすりつつ語りあふ日向ぼこ

枯葦の風の形に倒れ伏す

白息のごと煙立つパン工場

東風の梅ちよと紅見せて綻びぬ

地団駄を踏みてバス待つ冬の朝

初空を席卷したる鳶の笛

犬同士飛びつきあひて御慶かな

風花は天使の梯子かと思ふ

白壁に現れては消ゆる枯木影

日を弾く湖面の綺羅に浮寝鳥

星座盤かざして仰ぐ星月夜

朴落葉お面にかぶり子ら遊ぶ

田じまいの煙を抜けて一両車

吾はホ句夫はスケツチ秋日和

禅寺のしじまを破り鴟高音

秋風がたたたら走りす川面かな

都府楼の十万坪の虫浄土

稲穂波騒がせて飛機着陸す

トラックの荷台が舞台夏祭り

少年兵たりしを語る生身魂

朝錬の声に負けじと蝉時雨

不揃ひの椅子を持ち寄り夕涼み

昼寝覚^ぐだむ放流のサイレンに

紫陽花の毬川波に揺れやまず

雀らの野次馬めいて御田植祭

豆腐屋のラツパ近づく昼寢覚

棚なせる峡の植田の曲線美

吟行句会入選句

子午線を西へ東へ春うらら

沖遙か浮灯台の灯の朧

鎮座する句碑の袂の青蛙

園丁の粋な菅笠花菖蒲

内海の風に安らぐ浮寝鳥

ローカル線菜の花畑に傾きぬ

あとがき

私が俳句に興味を持ったのは、七年前の東日本大震災のあと「理不尽な災害をどう捉えたらよいか…」というテーマで書かれた『收容所から来た遺書』（辺見じゅん著）を読んだのがきっかけです。

極寒のシベリア收容所のなかで「僕達は皆一緒に帰国する。それまで美しい日本語を忘れてはいけません」と密かに句会を繰り返し、「句会るときだけは日頃の重労働の辛さが忘れられる…」と記された一節に驚きました。俳句には不思議な癒やしの力があるのだと…

それを機に学びの場を求めて試行錯誤するなかで、ウェブサイト『ゴスペル俳句』と出会い添削指導を受けるようになりました。全没が続くたびに何度も挫折しそうになりましたが、

この程度の試練に負けていては大震災で無念の死を強いられた方々に合わせる顔がないという気持ちで思いとどまりました。苦しさに耐え、それを乗り越えられたときにはじめて本物に出会えるのだということを実感しています。

十年続けられたらその節目にと考えていましたが、お奨めも頂いたので今後の糧としての第一句集をまとめることにいたしました。振り返ってみると吟行で出会った自然や土地の人たちとの一期一会、句友のみなさまとの楽しく充実した日々の思い出が次から次へと脳裏に浮かんできます。

最後になりましたが、初心者私を根気強くきょうまで導いてくださり、身に余る序文まで書いてくださったやまだみのさんと、悩み多い私を実の娘のように受け止めて励ましてくださる波出石品女さんとの尊いご縁に心から厚くお礼申し上げます。

またこれまで支えてくださった句友のみなさまと、背後で見守ってくれる主人にも感謝します。これからも命ある限り俳句をつづけていきたいと願っています。

平成三〇年七月吉日

おおた さつき

『秋日和』 おおたさつき句集

平成三〇年七月三〇日 印刷

平成三〇年七月三〇日 発行